

CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.124 October, 2014

目次

〈アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ〉..... 1	〈書評〉
〈CAPS主催企画の報告〉	南相旭「三島由紀夫における『アメリカ』」(彩流社、2014年) 文学部教授 遠藤 不比人.....5
報告「ワークショップ 女性の表現と政治 ——アジア、そして記憶するたましい」 CAPS客員研究員 村上 陽子..... 2	〈CAPS主催特別セミナー報告〉
連続ドキュメンタリー映画上映会 第2回 「長江にいきる ^{ピニア} 兼愛の物語」 CAPS主任研究員 田浪 亜央江.....3	井口博充氏「アジア系アメリカ人をめぐる教育言説・ 『タイガーマザー』を中心に」 CAPS客員研究員 趙 貴花.....6
〈センター叢書紹介〉	〈2014年度新規プロジェクトの紹介 第2回〉
湯山トミ子・宇野重昭共編著 『アジアからの世界史像の構築 ——新しいアイデンティティを求めて』(東方書店) 法学部教授 湯山 トミ子4	古代東アジアにおける漢字文化研究 文学部准教授 有富 純也7
	〈CAPS研究員 研究内容紹介〉
	「ベイズ統計学」の応用可能性 CAPS客員研究員 増田 篤.....8
	〈アジア太平洋研究センター(CAPS)活動報告〉9

アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ

10月18—19日、アラブ圏出身の作家などをお招きする企画

「越境・表現・アイデンティティーアラブ文学との対話」が開催されます。



とかく「物騒」なイメージのあるアラブ世界ですが、文学や表現という切り口からは、まったく違う世界が立ち現れてきます。アラブ圏出身の作家たちの来日を機に、困難な世界を大胆に行き来する文学／言葉との出会いの場を作り出したいと思います。

■パレスチナ難民のオーラルヒストリーを聴くームハンマド・ハッシューン氏を迎えて(10月18日 14:00～)

■越境・表現・アイデンティティーアラブ文学との対話：ラウイ・ハージ／モナ・プリンス／サミュエル・シモン氏を迎えて コメント：小野正嗣(作家／フランス文学)・山本薫(アラブ文学)・太田昌国(現代企画室)(10月19日 13:00～)

※いずれも会場は、10号館 2階・大会議室、参加費無料、逐次通訳があります。詳しくは学内に掲示されているポスターをご覧になるか、CAPS事務室までお問い合わせ下さい。

アジア太平洋研究センター(CAPS)資料室をご利用下さい

当センター資料室には、洋書9200冊・和書2600冊が所蔵されており、特に英語で書かれた日本関連文献やアジア地域の統計資料、中国関係資料、世界銀行出版資料、アジア経済研究所出版資料などに特色もっています。利用方法についてはセンターHPで確認いただくか、電話やEメールでお問い合わせ下さい。

【利用時間】■月～金曜日 9時30分から16時30分／■土曜日 9時30分から11時30分

CAPS主催企画の報告

報告「ワークショップ 女性の表現と政治——アジア、そして記憶するたましい」
CAPS客員研究員 村上 陽子

ワークショップは琴仙姫氏によるパフォーマンス「天国の門」で幕を開けた。会場は東京都小金井市にあるギャラリーブロッケンである。

一歩足を踏み入れると、薄暗い空間に揺らぐうそくの明かりの中、花々に覆われたふくらみがこんもりと浮かび上がる。ふくらみの奥の壁には白いスクリーンがあり、長く編まれた花鎖がその両側に垂れ下がっている。ふくらみはゆっくりと、密かに息をしているようだ。小さな足がほんのすこしだけ、花の間からのぞいている。

私たちは設えられた椅子に腰掛ける。この空間に集った人々のさわさわとした空気を鎮めるかのように鈴の音が一度だけ響く。スクリーンに海が映り、男性の声は何事かを語りはじめる。分断された朝鮮半島の北側に渡った彼は、多くの凄惨な死を目にしてきたのだと言う。海の映像の上を流れる日本語の字幕を介して私はその語りを受け取る。そして、私たちには献花を呼びかける手紙が手渡される。私たちはそれを読み、立ち上がり、花に覆われたふくらみの前でお線香をあげ、煙がたなびく中で思い思いの花を捧げる。やがて音楽が流れはじめると、花に埋もれて横たわっていたその人——私たちが悼み、祈りを捧げた死者——はゆっくりと動き出す。強ばっていた手や足を伸ばし、自分の体を愛おしむように、確かめるようにしながら、花々を押し回す。そしてしなやかに、みずみずしく、死者は踊る。踊り終わった死者は花を拾い上げ、私たちに手向けてくれる。まるで私たちこそが死者に悼まれる存在であるかのように。

このパフォーマンスに参加して、私はまず、その躍動する死者の身体に圧倒された。スクリーンの字幕を通して受け取ったのは飢えや貧困の中で死を遂げていった者たちをめぐる語りだった。しかし花々の中に横たわり、悼まれることを経て立ち上がってきた死者は、語りの中の無残な死者の姿とはまったく異なっていた。私たちの前に到来

したのは、生者よりも生き生きとした躍動する死者だ。到来してきた死者と語り中の死者の隔たりは、凄惨な死を死んだ者たちが別のかたちで取り戻されているという感覚を私に与えてくれた。

死者について語り続ける男性の口調はひどく淡々としていて、よどみがなかった。出来事は言葉をどれだけ重ねても語りきれないものを内包しているはずだが、それを自覚するがゆえに生者は出来事を語る言葉を練り直し、語り直し、語ることに習熟していくように思われる。そのような試みを通して出来事が語られ、受け渡されることによってはじめ、語りの及ばない領域も浮かび上がってくるだろう。その意味で、語りは出来事を体験していない人に対して、出来事を分有する回路を開くものであるのに違いない。だが死者たちはまさに出来事を語る言葉によって繰り返し呼び起こされ、凄惨な死を死ぬ場所に留め置かれているのかもしれない。

琴仙姫氏によって体現された躍動する死者は、凄惨な死を語る言葉の前では花に覆われて息をひそめていたが、悼まれることによって立ち上がり、舞い踊る存在へと変化していった。それは凄惨な死を語る言葉をあきらめないと同時に、凄惨な死とは異なるかたちで死者を取り戻そうとするパフォーマンスだったのではないだろうか。

パフォーマンス終了後、成蹊大学に場所を移して開催されたラウンドテーブルでは積極的な発言が相次いだ。特にこのパフォーマンスから東日本大震災というまったく別の破壊的な出来事とその死者が連想されたという発言が複数あったことが印象に残っている。舞い踊る死者の身体がただ一つの出来事へ収斂されていくのではなく、想像力を喚起させ、拡散させていくものであったからこそそのような発言がなされたのではないかと感じられた。

また、悼みの行為がお葬式的な形式によってな



されることは危うさをはらんでもいるのではないか、なぜこのようなかたちを取るのか、という問いかけもあった。琴仙姫氏は形式を取り入れることの危険性を認める一方で、アートのなものとしてアートのでないものの中にある表現をつかみとり、悼まれることのない死者を悼むことを今は目指したいと思う、と応答されていた。

悼まれることのない死者に近接していく回路を言葉や身体、アートが開いてくれる瞬間がある。本ワークショップでは、パフォーマンスとそれに応答する言葉の交錯の中で悼まれることのない死者をどのように取り戻していくかがそれぞれの仕方でも模索されていたように思われる。

連続ドキュメンタリー映画上映会 第2回 「長江に生きる ^{ビンアイ} 兼愛の物語」

CAPS 主任研究員 田浪 亜央江

アジア太平洋研究センターでは、今年度から「連続ドキュメンタリー映画上映会」をスタートさせているが、7月19日、その第2回上映会が開催された。試験期間直前の土曜日午後という決して良いとは言えないタイミングに2時間近い映画の上映を行なうことになったわけだが、中国から来日された監督のトークもあるためか早々と会場に向かう観客の姿も見られ、主催者としてはほっと安堵した。

「長江に生きる ^{ビンアイ} 兼愛の物語」は、中国の長年の「悲願」とされ、300億ドルの工事費をかけた国家プロジェクトである三峡ダムの建設のため、移転を迫られた住民たち、とくに兼愛とその一家の姿を追ったドキュメンタリーである。兼愛はあどけなさの残る笑顔が印象的な母親で、身体の弱い夫と娘・息子と暮らしているが、経済的な貧しさは随所に見て取れる。時おり政府から役人が派遣されて来て、一家に移住を迫る。周辺には、保証金を得てさっさと移住していく家も増えている。撮影期間の7年のあいだに一家は次第に追い詰められ、代替の土地を示しながらあの手この手で迫る役人との駆け引きのなかで気持ちを傾かせるが、最後にはしなやかな抵抗の姿を示し、観る者をはっと驚かせる。

上映の後はいよいよ馮艶監督と、本作配給に関わった藤岡朝子氏によるトークである。監督は1988年から日本に留学し、京都大学博士課程で農業経済学を研究後、小川伸介氏の作品に触発され、ドキュメンタリー制作を開始したという経歴の持ち主だ。

三峡ダム建設を扱ったドキュメンタリー作品はほかにもあるが、女性に焦点をあてた作品は珍しいのでは、と藤岡氏が水を向けると、はじめは兼愛を撮ろうというつもりはなかった、とやや意外な話が始まった。別の村から嫁いできた彼女にとって、村の外部から来た監督は、何でも自由に話せる相手だったようだ、監督も彼女を撮影対象だと考えずに、リラックスして対応していたの

だ、と。しかしある時監督は、兼愛の息子からの手紙を受け取る。エリートコースである第一中学校に入れたのに、母親の兼愛が移住を拒否しているために、保証金を受け取ることが出来ない。大学の学費を心配する息子は悩みぬき、監督に手紙を送ったのである。2002年に再び村を訪れてみると、周辺の家はすでに移住し、寂しい中での再会となった。「撮影して欲しい、というよりは、一緒に居て欲しかったのだと思う」、というのが監督の捉えた兼愛の思いだった。



こうした話を聞くと、シナリオが用意されキャストを決めてから撮影を開始する劇映画と異なり、偶然のなかで生まれ、事態の展開にカメラが寄り添いながら関与してゆくドキュメンタリーというものの不思議な由来をあらためて思う。兼愛はカメラの前で、山中で胎児を産み落とした壮絶な経験を語ったり、カメラから力を得たかのように目を輝かせながら印象的な言葉を口にしたりもする。全体の構造や圧倒的な力関係を変えることはできないが、カメラの存在が人を前に押し出し、あらたな現実を作り出しもするのだ。

今の日本でこの映画を再上映したいと考えた理由について、藤岡氏は福島原発事故のなかで土地を持っていた住民の多くが抗いながらもそこから離れなくては行けない事態が生まれていることについて言及した。それを受けた監督は三里塚で

の農民闘争についても触れ、日本の場合、政府が自分たちに相談なく決めたことに対し先祖代々の土地に愛着をもつ農民たちが反対するという構図であるのに対し、中国の場合は、(土地への愛着はあるにせよ)土地は公有であり、現金をほとんど持ったことのない農民たちは当初は保証金を得て喜んで移住したのだと説明した。しかし実際には家を建てることなど不可能な微々たる額で、彼らは町に出てから途方に暮れた。農民たちの無知につけ込んだ中国政府の非情な政策であり、それ

を感知し拒否を貫いたのが^{ベトナム}農民たちだった。

土地を手放すことを拒否した^{ベトナム}農民は、ダム建設によって自宅が水没したあと、畑にバラック建ての家を建てて粘り続け、少しずつ現金をため、何年もかけて家を再建したという。その「粘り強い」としか言えない行動に頭が下がる思いをするとともに、その場面をあえて映像化はせずにキャプションで説明し、観る者の想像力を刺激するという心憎いエンディングを配置した編集技にも唸らされたのである。

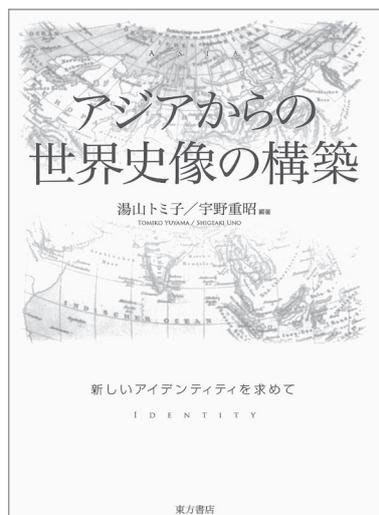
センター叢書紹介

湯山トミ子・宇野重昭共編著

『アジアからの世界史像の構築——新しいアイデンティティを求めて』(東方書店)

法学部教授 湯山 トミ子

本書は、アジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「アイデンティティの創生と多元的世界の構築——アジア・中国の磁場から」(研究代表者湯山) [註1]の最終研究成果物として、本年6月に刊行された。当該プロジェクトは、2010年、グローバルイゼーションが生み出す一元化の趨勢に対して、アジア地域の歴史的、社会的な多様性に着目して、多元的な世界



構築の可能性を考察することを目的に発足した。具体的には、「西欧の衝撃」以後、中国、日本、朝鮮が歩んだ固有の近代化とそれを生みだしたアイデンティティの在り方に注目して、新しい世界史像を構築すべく、3回のシンポジウムを開催した。[註2] この内、グローバルヒストリー論に着目して開催した研究最終年の国際シンポジウム『アジアからの世界史像の構築とアイデンティティの創生——中国・韓国・日本の視点から』が、直接本書の礎となっている。以下、本書の学術的特徴、基本構成について紹介したい。

近年、現代世界の展望を切り拓く歴史観として注目されるグローバルヒストリー論は、今後の世界史像を構築する上で重要な幾つの特徴をもっ

ている。特に、従来の歴史観で基本とされてきた世界—国家—地域の縦型ヒエラルキー、「西欧の衝撃とアジアの反応」という思考枠組みを脱却し、新たな世界史像を構築しようとする点に大きな特徴が見出される。本書では、巻頭に共著者宇野重昭教授が、「西欧の衝撃とアジアの反応」に示される西欧との対比によるアジア観を脱し、アジアとヨーロッパをともに異なる地域モデルとして相対化し、世界史を構築する要素とみて、その相互関係性を重視するグローバルヒストリーの視点を概説し、その視点から本書全体を構造的に分析する序論「アジアとヨーロッパの相互補完の時代——グローバルヒストリーの方法論に寄せて」を記し、次いで、第1部「アジアのアイデンティティ」に、グローバルな視点からの地域論、地域と国家の関係性による新たな世界史像を説く濱下武志教授による「グローバルヒストリーのなかのアジアのアイデンティティ」、被圧迫民族から世界の大国に発展した中国が未来に向けて発信する理念と達成目標の思想的、世界史的意義を読み解く宇野重昭教授による「中国から見える世界史像と複合的アイデンティティ——「中国の夢」と中国式「民主主義」の可能性」を置く。前者は経済的地理的アプローチによるネットワーク型、後者は複合的なアイデンティティによる内発的発展の特徴と意義を提示している。続く第2部、第3部には、アジアアイデンティティの独創的、自立的発展をめぐる各論を収めた。まず第2部「中国から日本へ、アジアから世界へ」では、それぞれの近代化を形成する基盤としての「近世」に着目した光田剛教授による「アジアの近代化と日本」、「アジアという思考空間」の独自性を説く孫歌教授による戦後日本の知識人と中国革命の思想的関係性、意義を再

考する「戦後日本思想史における“中国革命”」、地域、国家によるグローバルヒストリー論に下からの視点、民衆論を提起する「中国から世界へ——もう一つの魯迅像、「マルチチュード」の時代に向けて」(筆者)を置き、第3部「朝鮮半島から世界へ」には、川瀬貴也准教授による「植民地朝鮮における「宗教」と「政治」——天道教の動向を中心に」と福原祐二教授による「通底する「朝鮮半島問題」の論理——朝鮮民主主義人民共和国の核兵器開発と竹島/独島」の二編を置き、ともすれば南北相対立するかに見られる朝鮮半島の根底にある思考の特質、特徴を掘り下げ、世界に向けて発信した。

以上により、東アジア、中日朝鮮における西欧近代の受容とそれぞれに固有の「近代化」の特質を考察し、現代世界のグローバリゼーションによる一元化の趨勢に向きあう自己形成力、アイデンティティの役割を照射した。より原理的に言えば、西欧近代による普遍性、グローバル化による一元化に内在する自己増殖性が誘発する固有性の形成、展開の内に、多元的世界を構築する多様性、多層性を生み出すメカニズム、ナショナルな画一性、排他性を越える新しいアイデンティティの役割を読み解こうとしたのである。むしろこのメカニズムは、予定調和的に生み出され、機能するものではない。反発、抵抗、協調、融合、浸食、浸透など、苛烈な戦闘性、自己形成の内的努力によ

りはじめて展開されうるものである。グローバルかつアジアの固有性が生み出す新たな世界史の創造、多元的世界の構築を目指して、国家、地域、個人は、それぞれいかなるアイデンティティを形成しうるのか、自律的で、多層的な関係性を創造する磁場をいかに構築できるのか、西欧と非西欧の交叉性をもたらす新たな人類史創造の価値と可能性に向けて、本書が新たな思考、思索を促す一助となることを願う次第である。

最後に、本書刊行に協力、尽力されたすべての関係者にあらためて深く感謝申し上げたい。

[註1] 研究代表者湯山のほか、プロジェクトコアメンバーに成蹊大学法学部教授光田剛、プロジェクト顧問宇野重昭成蹊大学名誉教授・島根県立大学名誉学長で構成される。

[註2] 2010年『多元的世界への問い——帝国の時代の言語とアイデンティティ』、2012年『多元的世界の構築におけるアイデンティティの創生』を開催し、各年度の研究活動を含めた報告書を刊行している(三恵社2011年、2012年)。また、2010年12月に開催したミニシンポジウム『ことば・文字・女の解放』(日本ジェンダー史学会第7回大会第2パネルディスカッション)については、『アジア太平洋研究』No36、〈特集論文2: ことば・文字・女の解放〉(2011年 pp55～85)に成果論文を公表している。

書評

南相旭著『三島由紀夫における「アメリカ」』(彩流社、2014年)

文学部教授 遠藤 不比人

本書の題目がかくも簡潔でありうるのは、その批評的な喚起力ゆえにこれ以上の言葉を無用に行っているからではないか。つまり三島由紀夫における「アメリカ」が、従来のところ真剣で高水準の読解の対象になっていなかったという事実を、この簡略な題目がさりげなく、しかし含意としては辛辣に、語っているように思える。事実、三島を論じてきた名だたる批評家たち——ドナルド・キーン、松本徹、江藤淳、佐伯彰一ら——がこの主題をほとんど無視するか、それを議論したとしてもその本質・深層にまで筆が及ばぬ次第を、本書の序章は詳らかにする。三島における「アメリカ」の重要性は、ひとり三島の作家論的な研究の域に留まらぬ、むしろそれは戦後日本の文化研究においても決定的な意味を有する——この点を序章は強調する。それゆえ本書は三島の小説における細部の表象が同時代の言説のネットワークによって重層決定 (overdetermination) される様を仔

細に吟味する。つまり昨今の「文化研究 cultural studies」の洗練された方法論を採用し、それに成功している。作者が明示するように、戦後日本の保守思想が「拝米」と「排米」(30頁)のアムビヴァレントな混濁を特徴としているのだとすれば(現政権の「集団的自衛権」と「靖国」への拘泥の同時性を想起しよう)、本書の射程のアクチュアリティは自ずと知れよう。別言するなら、戦後日本のナショナリズムが複数の「アメリカ」を相互に矛盾する形で介在させることにより成立した経緯を、本書は三島という特異かつ特権的な事例を通じて浮き彫りにする。

本書が選択するテキストは、「花ざかりの森」『金閣寺』『鏡子の家』『美しい星』『音楽』である。それぞれは「太平洋戦争直前」「戦前から朝鮮戦争」「サンフランシスコ講和条約から五五年体制」「安保闘争[および]核戦争」「高度成長」つまり「時代によって異なる『アメリカ』」(36頁)をその文脈とする。

特に「花ざかりの森」『金閣寺』『鏡子の家』に関する読解が洞察に満ちている。以下、その議論を要約しよう。戦前の学習院に在籍した三島が「花ざかりの森」の「母」に書き込むのは既に戦前において「大衆化」の別名であったアメリカではなく、上流階級が経験し得た「貴族文化」と対立する「婦人運動」(55頁)を促進するアメリカであり(津田梅子のそれである)、真の(貴族)文化とは「主体性」の消去にあるという三島年来の思想の重要な萌芽をこの「処女作」に読む議論は刺激的である。日本人女性への米兵の性暴力に加担する日本政府(慰安所設置)という戦後の政治的事実のアレゴリーを『金閣寺』の米兵と語り手の関係に読み、同時に米国により再審美化された金閣寺という視点を導入し「暴力」と「文化」に両極化するアメリカを前景化しつつ、非自然=暴力化された舞鶴港に米軍の抑圧を指摘しながらも、朝鮮戦争と金閣放火が連動する点を鋭く指摘し、占領の外部への模索が米国との同一化に至る閉塞を喝破する論点は、戦後の言説空間の重層決定性を見事に炙り出す。『鏡子の家』における「焼跡」が占領政策の外部=自然たることを読み解き(田村泰次郎の『肉體の門』を連想しよう)それが戦前の日本と接続する逆説を論じ、鏡子の家から眺望できる代々木の「森=自然」に明治憲法(天皇)の消失を読みつつ(ワシントンハイツがここで象徴的)、「娯楽センター」の銃器の玩具に着目しながら「娯楽」と「暴力」に表象されるアメリカのみならず、日本の「再軍備」という文脈をそこに明察する解釈は、三島と「アメリカ」との一枚岩ではない交渉を周到に示す。同時に、米国型ス

ポーツ=肉体という連想をそこに重ね(ボディビルはその典型)その脈絡で非意味としての自然の露出に無力な「芸術」(人工性)という主題を示唆



するこの章は、その後の三島の行く末を見事に暗示している。

これらの読解が示唆するのは、三島が戦後に彼独自の「日本」を構築する際にかくも強力な参照枠として差異を伴いながら反復する「アメリカ」を無視する批評が、戦後文学あるいは戦後文化の批評としても致命的な死角を孕むことである。そしてこの問題系がいま現在もその意味を失っていないことは言うまでもない。本研究センターの叢書として『日本表象の政治学』を今年出版し、そこで三島論を書いた立場から最後に一言。三島の美学=政治学において真に重要なのは、本書が通説に従って述べる明治天皇ではなく、ほかならぬアメリカの生産物である「象徴天皇」であったというパラドクスは、本書の洞察と意義深く対話するはずである。

CAPS主催特別セミナー報告

井口博充氏「アジア系アメリカ人をめぐる教育言説・『タイガーマザー』を中心に」

CAPS 客員研究員 趙 貴花

7月31日(木)、本学10号館2階第2中会議室にて、CAPS客員研究員でニューヨーク州立大学バッファロー校客員教授の井口博充氏による特別セミナー「アジア系アメリカ人をめぐる教育言説・『タイガーマザー』を中心に」が行われた。主催はCAPSであった。

エール大学教授のエイミー・チュアの著書『タイガーマザー』はアメリカで2011年に出版されたベストセラーで、大きな注目を集めた本である。井口氏は、まずアジア系の子どもたちが表紙に載っているアメリカのタイムズ紙の画像を示し、「賢いアジアの子どもたち」がモデル・マイノリティ論の典型的な表象であると語った。モデル・マイノリティ論は、社会人口学者のウィリアム・

ピーターセンが1960年代後半にアフーマティブ・アクションを批判するために使い始めた言葉である。しかし、多くの研究者が実証的なデータをもとにこの理論を批判するにもかかわらず、モデル・マイノリティ論は依然として公の場の議論でも繰り返し現れているため、オルタナティブな研究パラダイムが必要であり、モデル・マイノリティ論を社会的な言説として検討することが有効であると主張した。

次いで、井口氏は『タイガーマザー』をモデル・マイノリティ言説の現代バージョンであると指摘した。同書は、チュアが2人の娘を「中国式」スパルタ教育で厳しく育てた回想録である。チュア自身はアメリカ生まれの中国系移民2世であり、家

庭内における中国
式教育を移民3世
となる娘たちに行
うことで、教育的
な成功を達成しよ
うとする。この本
では「子どもたち
は頭が良い」こと
が高く評価され、
子どもたちは「勤
勉」で「従順」ある
べきことが強調さ



れている。チュアは娘たちを「従順な中国の子ども」に育てようとしたのである。こうしたことから、この本は明らかにモデル・マイノリティが素質と努力からなるものであるというモデル・マイノリティ言説にあてはまるとともに、子どもたちの成功において親の努力が重要であることを暗に主張しているとも言えると述べる。

さらに、井口氏は、この言説が現れた社会的文脈として、特に2000～2010年の間にアメリカのアジア系が46%増加し、彼らの教育達成はアメリカの平均値より高くなっていることが『タイガーマザー』が注目される一つの要因として考えられるとした。筆者から見れば、2010年にOECD（経済開発協力機構）が発表した各国の学生の学力調査で上海が全3科目でトップを独占したことも、中国式的教育法に対する関心が高まった一つの要因であると考えられる。

井口氏によれば、モデル・マイノリティ言説の効果の一つは、この言説が大きな公の論争を引き起こしたことにある。例えば、2011年1月13日付のニューヨークタイムズは同書について議論した。しかし、チュアを全面的に支持する論者はい

なく、討論を読んだ読者の大半もタイガーマザーの子育てには批判的であった。同書はアメリカだけでなく、多くの国で翻訳出版され、議論されてきた。しかも、チュアが主張する「中国式教育」に関して、中国の読者の中には必ずしもそれを「中国式」として見るわけではない。むしろ若い親たちは子どもたちにより自由を与える教育を実施しようとしている。しかし、井口氏はこのような論争が起こったこと自体が、アメリカで主流となっているリベラルな「子ども中心主義の子育て」が必ずしもうまく行っているわけではないことの表れとして見ることもできると指摘した。

これに加えて、井口氏は、モデル・マイノリティ言説はジェンダーと子育てを巡る言説、アジア人やアジア文化を巡る言説、アメリカン・ドリーム言説、アメリカの人種を巡る政策言説などに関わりがあると考えられると指摘した。また、井口氏はチュアの家族の写真を紹介し、写真の中にアメリカの中産階級の価値観が現れていることや家庭における女性の役割及びアジア人女性という人種的なアイデンティティを積極的に主張していることなどが看取され、この写真はモデル・マイノリティの家族の特徴を表す写真であるとした。

最後に井口氏は、『タイガーマザー』は高学歴プロフェSSIONALにアジア系が増えていることを正当化していること、保守的な「親中心の子育て」を再評価していること、アメリカン・ドリームのものを肯定していること、親に金銭的・時間的余裕や文化的な資本が必要であること、子育てや家庭の維持の責任が女性にあること、アジア的なもののステレオタイプを助長していると批判した。その後、参加者たちから『タイガーマザー』及び井口氏の報告をめぐって活発な議論が行われ、セミナーは盛況のうちに幕を閉じた。

2014年度新規プロジェクトの紹介(第2回)

〈2014年度パイロット・プロジェクト〉 古代東アジアにおける漢字文化研究 文学部准教授 有富 純也

「古代史にはロマンがある」という言葉があります。実際には地道に研究していると、「ロマン」なんてものはこれっぽっちもないことに気づかされるのですが、なぜ上述のような言葉が生まれるかといえば、日本古代史では、残っている文献資料が比較的少なく、文献から歴史を構成することが難しいため、どうしても推測に頼らざるをえない部分が生じます。その推測部分を頭の中で想像をめぐらすのは非常に楽しく、たとえば、A君と

Bさんが男女関係にあったため何々という戦乱が生じた、と考えるのは、確かに「ロマン」といえるかもしれません。

冒頭から脱線してしまいました。ここでは、古代史において文献資料が比較的少ない、という点を強調したいのです。たとえば日本の7世紀がどのような社会・国家だったかを考えたいとき、文献からのみ探ろうとすると、『日本書紀』という歴史書を除けば、ほとんど手がかりはありません。

しかも『日本書紀』は国家によって作られた歴史書ですから、どれほど真実を語っているかわかりません。また、国家の歴史書ですから、中央政府の政変や政策について記述しているものの、地方でどのようなことが起こっていたのか、あるいは名もない民衆がどのような生活を送っていたかなどについて、『日本書紀』は多くを語りません。

そこで重要になるのが、発掘された考古資料、特に木簡や墨書土器とよばれるものです。木簡は、木の札に墨で文字が書かれているもので、1960年代に奈良の平城京で多数出土して以来、首都であった奈良だけでなく、地方からも多くの木簡が出土するようになりました。物品の付札（今でいえば宅急便の伝票みたいなものでしょうか）に使われたりします。墨書土器は、土器に墨で字が記されているものをいいます。ほとんどが1字か2字のみ記されている程度なのですが、長文の文字を記すことも稀にあり、意外なことがいろいろとわかる場合もあります。木簡や墨書土器を用いることで、『日本書紀』などの文献資料では知ることができない日本古代の諸相を多く発見することができたのです。

このような学界の状況のもと、2000年代に韓国における木簡研究の進展にともなって、日本の木簡と比較検討するべく、韓国のそれが研究されるようになりました。折しも、「学問の国際化」が声高に叫ばれる時代です。日本史研究者も自国にとどまるのではなく、韓国での成果を取り入れようと、様々な大学でプロジェクトが組まれるように

なりました。また韓国でも『木簡と文字』という専門雑誌が発刊され、多くの研究者がすぐれた成果を発表しています。

しかしながら、韓国で墨書土器の研究はほとんど行われていません。私は、膨大な研究史のある分野に果敢に飛び込むタイプではなく、あまり研究者のいない分野を研究する「隙間産業」的な研究者なので、この韓国における土器研究はあらたな成果を生み出せるのではないかと考えました。特に、土器に記された漢字の利用方法について、日韓の比較研究をすると面白いのでは、と着想しました。

すでに木簡などの解読から明らかにされていることですが、漢字の利用は、日本列島と

朝鮮半島で異同があります。たとえば、日本列島で漢字が広く利用されるのは7世紀半ば以降で、8世紀から本格化するのですが、朝鮮半島ではそれより百年早いとされています。これが何故なのか、明らかにはなっていません。

またそもそも、土器に文字を記す行為にどのような意味があるのか。あるいは、日韓でその意味に違いはあるのか。その漢字使用のあり方はどのように異なるのか。一般の人びとからすれば、「何が面白いの?」というようなことを夢想し、それを論証しようとしています。土器に記された、たった1字程度の文字を解釈することから、古代東アジアの様々なことを知ることができるのです。前言撤回します。やっぱり、古代史には「ロマン」がある！



韓国・咸安の城山山城。ここから木簡が多く出土したことによって、韓国における木簡研究の火が着いたといっても過言ではありません。2013年8月のある日、仲間と一緒に現地へ向かい、道なき山道を登り遺跡にたどり着くと…発掘はお休み、ブルーシートがかけられているだけでした。

CAPS 研究員 研究内容紹介

「ベイズ統計学」の応用可能性

CAPS 客員研究員 増田 篤

現下の研究テーマとして、計量ファイナンス、特にベイズ統計学の応用による金融市場とマクロ経済の分析に関心をもっている。

この分野に関心をもったのは、国際協力銀行の外国審査部におけるソブリンリスク分析の実務経

験がきっかけである。国際協力銀行の融資先は100ヶ国におよぶが、信用リスク管理の一環として、重要な国に定期的にマクロ経済審査ミッションを派遣して、政策担当者と意見交換を行っている。各国の政策機関が研究者個人の見解として発

表する分析には、その時々政策運営における問題意識が反映されていることが多く、それらを知ることがマクロ経済審査の重要なツールとなる。

過去30年間で、マクロ経済モデルは大きく変容を遂げた。各国の財務省や中央銀行など経済官庁が経済分析のために運用している経済モデルも、学問的な展開の影響を受けながら大きく変容している。

世界の政策当局の調査部門が運用するマクロ経済モデルの変容には、2つの大きな共通点がある。第1に、従来の大規模計量モデルは、確率的動的一般均衡(DSGE)モデルにとって代わられた。マクロ政策の効果は、各経済主体の期待を動かすかどうかによって大きく左右されるので、経済主体の最大化行動というミクロ的基礎を踏まえたマクロモデルを構築することがマクロモデルの関心事となったことが背景である。第2に、マクロ経済分析におけるリスク分析への関心の高まりがあげられる。1997年のアジア危機、2010年のユーロゾリン危機ともに、資本市場の急速な悪化が危機の一因であった。こうした資本市場の不確実性、銀行部門のストレスが金融仲介全般に及ぼす影響、大規模災害に伴う財政負担増の不確実性など、財政・金融政策が直面するリスクファクターをマクロ経済分析に織り込む努力が重ねられている。

上記の計量ファイナンス分析やDSGEモデルの実証分析を行う手段として「ベイズ統計学」が重要性を増している。ベイズ統計学の歴史は長いが、近年、実務への応用も含めて急速に役割が拡大しているのは、従来、解析的に計算が不可能であるような複雑な事後分布の計算が、パソコンの性能向上により可能となったところが大きい。

計量ファイナンスの分野では、ボラティリティの変動モデルには、大別してARCH型モデルと確率的ボラティリティ変動(SV)モデルがある。SVモデルは、ボラティリティのモデル化において応用範囲が広い構造を持っているが、尤度を解析的に表現できないという難点がある。この点を解決

したのがベイズ推定法のひとつであるマルコフ連鎖モンテカルロ(MCMC)法である。MCMC法ではいろいろな計算方法が提案され、計算効率の改善を競っている。MCMCは正規分布以外の広範な分布に適用でき、高次元でも計算可能であるので、多様な分野で利用されている。

当初はカリブレーションでモデルの動きを評価していたDSGEモデルについても、ベイズ統計学のフレームワークを適用して、データとモデルの定式化の整合性を評価し、モデルの実証的評価を行う方法が広く使われている。DSGEモデルには通常経済変数の確定的な関係と、変数間制約を確率的にする構造ショックが含まれるが、この確定的な関係は通常観察されず、尤度が常にゼロとなるという問題がある。「正しいモデル」をどうやって選択するかが、重要な鍵となるが、この面でもベイズ推定は威力を発揮する。

こうした計算技術の改良により、景気循環モデルの応用、空間モデルによる地域間連関関係のモデル化、レジームスイッチモデルなど応用の幅が広がっている。ゼロ金利制約下での金融政策の影響の評価など、均衡付近の線形近似という従来の解法が不適切となるケースでは、逐次モンテカルロ法のひとつである粒子フィルタが利用されている。この方法は非線形の状態空間モデルでも尤度の計算ができるという利点があるが、計算負荷がたかくなるため、MCMCと組み合わせて効率化するなど、手法の開発は日進月歩である。さらに、パラレルコンピューティングの適用により計算速度の向上も図られている。

私自身の目下の課題は、構造型の信用リスクモデルのベイズ推定である。毎年新しいデータが入手できるたびに、構造型モデルのベイズ推定をアップデートし、信用リスクのフォローアップに活用することができるため、ベイズ推定法の適合性が高い分野である。政策運営が直面するリスクファクターを明示的に組み込んだ実務に活用できるモデルの開発を目指したい。

アジア太平洋研究センター(CAPS)活動報告(2013.12.16～2014.3.15)

公開講演会、研究会、研究出張などの記録

- ◇6月18日(水) CAPS主催・公開講演会、15:00-17:30
 テーマ:3・11から未来を創造する—文明の転換期にある日本と世界—
 講演者:宇宙物理学者・名古屋大学名誉教授・池内了
 場所:6号館3階

- 出席者:232名
 ◇6月24日(火) 古代東アジア世界における漢字文化プロジェクト海外出張(6月26日まで)
 出張者:文学部准教授・有富純也
 出張先:ソウル(大韓民国)
 目的:韓国・ソウル国立博物館において、同博物館図書館内の韓国考古学関係報告書の調査、および、同館学芸員イビョンホ氏との打ち合わせ

- せ
- ◇6月30日(月) CAPS主催・連続ドキュメンタリー映画上映会、第1回目開催、16:45 - 19:00
上映映画:『自由と壁とヒップホップ〜SLINGSHOT HIP HOP〜』(2008年、パレスチナ・アメリカ)
場 所:6号館401教室
出席者:130名
- ◇7月13日(日) CAPS主催・セミクロードワークショップ、14:00 - 18:30
テ ー マ:琴仙姫さんを囲んで一女性の表現と政治 アジア、そして記憶するたましい
パフォーマー:琴仙姫(アーティスト・映像作家)
場 所:ギャラリーブロッケン・10号館2階教室
出席者:30名
- ◇7月14日(月) ライフコースの国際比較研究:多様性と不平等への社会的アプローチプロジェクト国内出張(7月18日まで)
出張者:CAPS特別研究員・大崎 裕子
出張先:パシフィコ横浜(横浜市)
目 的:国際社会学会2014に参加のため
- ◇7月16日(水) 合衆国における「労働」の文化表象プロジェクト海外出張(7月22日まで)
出張者:静岡大学情報文化学部専任講師・岡田 泰平
出張先:シンガポール、マレーシア(マレー半島南部)
目 的:AAS-in-Asia 学会(シンガポール大)での発表とマレー半島南部の現地調査
- ◇7月19日(土) CAPS主催・連続ドキュメンタリー映画上映会、第2回目開催、15:00 - 18:30
上映映画:『長江に生きる 〜乗愛(ビンアイ)の物語〜』(2008年、中国)
場 所:3号館101教室
出席者:45名
- ◇7月24日(木) ネイションと文学プロジェクト海外出張(7月29日まで)
出張者:文学部准教授・小林 英里
出張先:ロンドン(イギリス)
目 的:所属学会 Postcolonial Studies Association の国際会議“Resources of Resistance”に参加し、さらに London の帝国戦争博物館とチャーチル館を訪館するため
- ◇7月31日(木) CAPS主催・特別セミナー、15:30 - 17:00
テ ー マ:アジア系アメリカ人をめぐる教育言説:『タイガー・マザー』を中心に
講演者:CAPS客員研究員・井口 博充
場 所:10号館2階第2中会議室
出席者:14名
- ◇8月20日(水) 古代東アジア世界における漢字文化プロジェクト海外出張(8月23日まで)
出張者:文学部准教授・有富 純也
出張先:ソウル・全州(大韓民国)
- 目 的:韓国・全州国立博物館、益山弥勒寺、およびソウル国立中央博物館において調査。および、ソウル中央国立博物館学芸員イビョンホ氏との打ち合わせ
- ◇8月23日(土) 近代中国の危機言語と言語政策プロジェクト海外出張(9月11日まで)
出張者:法学部准教授・李 林静
出張先:黒龍江省チチハル市(中華人民共和国)
目 的:ホジェン語および北方少数民族に関する資料収集
- ◇8月26日(火) マニフェスト・ディスティニーの情動的効果と21世紀惑星の想像力プロジェクト海外出張(9月11日まで)
出張者:文学部教授・下河辺 美知子
出張先:ニューヨーク(アメリカ合衆国)
目 的:ニューヨーク市立図書館にてハーマン・メルヴィルの資料収集および、ハンナ・アレント関連資料収集、および Prof. Evelyne Ender と打ち合わせ
- ◇8月29日(金) 日韓比較メディア研究プロジェクト海外出張(9月4日まで)
出張者:文学部特任教授・奥野 昌宏
出張先:ソウル(大韓民国)
目 的:「日韓比較メディア研究」プロジェクトにかかわる調査および韓国側研究分担者との協議
- ◇8月29日(金) 環境浄化材料の創製についてプロジェクト海外出張(9月6日まで)
出張者:理工学部助教・井上 元基
出張先:イスタンブール(トルコ共和国)
目 的:Istanbulにて開催される5th EuCheMS Chemistry Congress において、“Preparation of glutaraldehyde-crosslinked grape-waste and its recovery ability of precious metals”と題した発表を行うため
- ◇8月31日(日) ライフコースの国際比較研究:多様性と不平等への社会的アプローチプロジェクト国内出張(9月1日まで)
出張者:CAPS特別研究員・大崎 裕子
出張先:日本女子体育大学(東京都)
目 的:第58回数理社会学会大会に参加のため

CAPS Newsletter No.124

2014年10月15日発行

編集発行:成蹊大学アジア太平洋研究センター
〒180-8633 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549 (ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: <http://www.seikei.ac.jp/university/caps/>